ホタルの谷の小さなキッチン

Little kitchen in the valley of fire fly

ソーシャルファーム長岡の小さなキッチンから、障がいを持つ仲間たちが一緒に育てた果実や
ホタルが舞う里山のハチミツで仕込んだ、やさしい甘さのジャムシリーズ。

ホタルの谷のやさしい蜂蜜
¥900

長岡の自然豊かな環境から
ミツバチが集めた蜂蜜のおすそ分け

極上いちごジャム
¥900

フランス料理音羽シェフ監修の
とちおとめの粒がまるごと残した
とっても贅沢なおいしいジャム

ホタルの谷の蜂蜜仕込ジャムシリーズ　各種¥500

ブルーベリージャム

ブラックベリージャム

いちごジャム

うめジャム

ジューンベリージャム

ルバーブジャム

ソーシャルファーム
NAGAOKA

ソーシャルファーム長岡は里山の自然での農業生産、養蜂、農産品や蜂蜜の加工販売、山羊の飼育を通して、障害のある方と社会を結びつける取り組みをしています。

お問合せ・ご注文はこちら

tel 028-680-6612

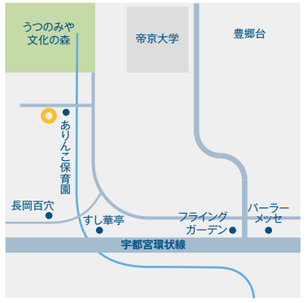
http://www.socialfirmtochigi.org/

ソーシャルファーム長岡

〒320-0004 栃木県宇都宮市長岡町 293
tel 028-680-6612　fax 028-680-6613

一般社団法人 ソーシャルファーム栃木

本部：〒321-0152 栃木県宇都宮市西川田 7-1-2
http://www.socialfirmtochigi.org/



LET US WORK TOGETHER...

里山を守り、育て、ともに生きる仕事。

こらぼワーク × ソーシャルファーム長岡

CO-LABO WORK and Social Firm NAGAOKA

こども、おとな、高齢の方、障がいや働きにくさを抱えた方…
さまざまな立場の人たちが集まり、働き、支え合いながら、
自然とともにくらすコミュニティをつくりたい。

こらぼワーク設立から思い描いていた夢であり、
その想いを実らせたのが長岡という里山です。

「ソーシャルファーム長岡」は、豊かな里山を守りながら、
働きにくさを抱えた人を応援する取組みをしています。

耕作放棄地だった場所が「失われつつある里山の力を活かしたい」
と想いによって、有機的につながっていく。
この里山から、新しい働き方、くらし方の未来が
ゆっくりひらかれています。

SOCIAL FIRM NAGAOKA
Map

ようこそ、蛍とミツバチが暮らす福祉と協同の里へ

緑豊かな静かな里山、蛍が生息する自然豊かな川のほとりで、
障がい、福祉、仕事が有機的につながる、新しい農業がはじまっています。

こらぼワークの設立当初からあった「福祉と協同の里」というビジョン。
それは、里山に福祉と労働を支援する施設を集約させたコミュニティをつくるというものでした。
ソーシャルファーム長岡はその想いが実った桃源郷のような場所。
宇都宮から車で20分の都会と自然との間、里山の環境を活かすために平成 24 年にスタートしました。
隣接地には、関連法人の社会福祉法人美のりの里が運営する高齢者福祉施設「のん美里ホーム」と「ありんこ保育園」。さらに、里山を整備し、子どもたちのより良い遊び場、教育の場を将来に残そうと取り組む「あおぞらきっず」。

豊かな里山を舞台に、子ども、障がい者、高齢者、様々な人が助け合いながら人間関係を築き、循環型社会を目指して暮らしています。

INTERVIEW

里山で見つける、自分をいかす働き方

障がいを持つ方々へ農業を通じて働く場をつくる
ソーシャルファーム長岡

KENJI UENO

上野 健二

施設長
サービス管理責任者

里山と障がい者のチカラを最大限引き出すために

良質な資源があっても社会の変化や人手不足から、休耕農地となってしまった里山が日本にはたくさんある。ソーシャルファーム長岡 (以下 SF 長岡) もそのひとつ。「豊かな自然環境は、障がいのある方の個性を活かす仕事をつくるのに最適なのでは」と平成 24 年に立ち上げた事業所だ。働きにくさを抱えた人に向けて、里山を活かす農作業を中心とした「就労継続支援 B 型」と、街をきれいにする清掃業務での「就労継続支援A型」を併設している。スタートして4年目、B 型1 8名、A 型3名と利用者さんの数が昨年秋頃から増え続けて軌道にのりはじめている。「農作業は、生産・収穫・加工・販売といろいろな作業が生まれるので、それぞれの障がいに合わせた仕事をつくりだすことができるんです。何より、自然が相手の農業は、人の心を癒して豊かにしてくれますから。」と目を輝かせながら話してくれたのは、施設長の上野さん。前職は福祉系の仕事。精神保健福祉士の資格を有しながら、ロハスなくらしに憧れ「露地物野菜を作ってみたい」と夢見てきた。やっと叶ったここでの仕事は順風満帆とはいかなかった。というのも、働きにくさを抱えた人の体調も自然もその時々で表情を変える。状況を見ながら繰り返す試行錯誤の日々は厳しいものだった。さらに、中山間地域でもともと荒れていた難しい土地での農業は、プロの農家でも容易なことではないだろう。それでも、上野さんには福祉の主流を知っているから分かる「SF 長岡は独自の道を行っている」という自負がある。

自然の中でとにかく楽しく
みんなで農業をやろうよ

里山の森の中に心地よく広がる畑。まるで隠れ里のような場所には、スタッフ、利用者、みんなのいきいきとした笑顔であふれている。土に触れ、太陽の光を浴びながら、体を動かすというのは勿論あるものの「障がいのあるなしに関係なく、みんなで楽しく働こう」という上野さんの原則が根付いているからだろう。フィールドが広い農業だからあまり細かい規則にはこだわらない。「作物を作ることは、日本独特の四季や自然を肌で感じてもらうということ。室内作業だけでは得られない貴重な体験ですよね。充実した時間を過ごしてもらうことを第一に。それを利用者さんに伝えられれば嬉しいですね。」

自分たちでつくった農産物が、近隣のスーパーや産直で販売されるまで、すべて手作業。配達やイベントで自ら売る機会も積極的に設けている。「この前の野菜おいしかったよ」、そんなお客様とのふれあいがモチベーションにつながっていく。利用者さんの作業は、その日の体調や天候などで分担。畑の人は草むしりや収穫を、室内の人は蜂蜜の瓶詰めや収穫物の袋詰め、お店への配達がある。

ひと休みのお楽しみは、お昼ごはん。規格に合わないはじいた傷物を、味を知るためにみんなでいただくことにしている。この季節ならではのタケノコで作るお味噌汁は人気メニュー。同じ釜の飯を食べた仲間、スタッフ同士や利用者さんとの間に自然と一体感が生まれている。

「何かしか抱えていた人たちが、いい環境で仕事をすることで、働く喜び、やりがいを感じてもらえたから、一般就労や他の事業所にステップアップしていってくれました。口コミで広がって利用者さんが増えて、ようやく結果が出始めた時期なんです。今後の目標は、売り上げを伸ばして利用者さんの工賃をあげること。そして、B 型の利用者さんをもっと増やしていくことです。まわりの農家さんの支援を視野にいれながら、将来的に本格的に農業で生きていく人がでてきてくれるのが理想ですね。」それがスタッフみんなの思い。

4年間で次のステージへ向かっている確かな手応えを感じながら、またひとつ笑顔を増やすために SF 長岡のチャレンジは続いていく。

INTERVIEW

多様な人がつながり、みんなで楽しめる里山を目指して

障がいを持つ方々へ農業を通じて働く場をつくる
ソーシャルファーム長岡

職業指導員
石川 栄作
EISAKU ISHIKAWA

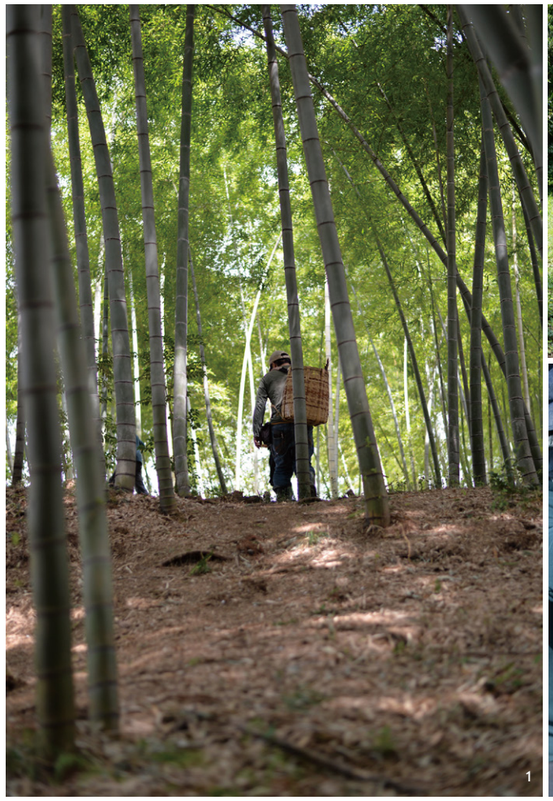
生まれ育った里山への恩返し

目を凝らすとそこかしこに命が芽吹き、耳を澄ませばぶんぶんとミツバチたちの羽音が響きわたる。SF長岡に待ちわびていた春がやって来た。「うちの売り上げのメインは、タケノコと蜂蜜です。春はタケノコが出荷ラッシュ。掘るのには体力がいって、重くて大変。ミツバチも爆発的に増えて分封がはじまるし、育苗をする季節なんで休まず水やり、しかも植え付ける畑の準備も…とにかく今が一年で一番忙しくて大変なんですよ」と、腰をさすりながらも優しい眼差しで畑を見つめる石川さんは、職業指導員として利用者に農業を教えている。

SF長岡の地主で、家が兼業農家。フクロウ、サシバ、野うさぎ、きじ、たくさんの生き物が生息する貴重な土地は、水が引きにくく生産性が低いため約27年前に耕作放棄地となってしまった。「小さな頃から遊んできた里山をなんとか活かしたい」とサラリーマンを辞めて選んだ就農への道。こらぼワークのスタッフが親戚だったことが転機となり、SF長岡の一員として農業をすることとなった。

「本当は早く定年して、孫と一緒にこで遊べたらいいなと思ってね。」SF長岡の敷地内には、石川さんの創意工夫と遊び心に溢れている。切り干し大根作る用の竿。マスコットやぎのモモちゃんの柵…など、どれもSF長岡で自生している竹を再利用したもの。この竹林のさらなる魅力は、多くのファンがいるというタケノコだ。「あくが少なくておいしい」と近隣のレストランや住民から評判で、毎年春からGWにかけての収穫シーズンを楽しみにしてくれているという。効率を考えて二人三脚で行うタケノコの収穫。石川さんとコンビを組むのは、昔懐かしい大きな竹かごをひょいと背負う利用者の田中さん。石川さんがテンポ良く掘るタケノコをあうんの呼吸で拾い上げる。田中さんはSF長岡の古株で、「やぎのももちゃんの世話をさせたら右に出る者はいない」と石川さん。何かしか自分が一番という仕事がある。冗談を交えながらのふたりのやり取りは、まるで本当の家族や親戚のよう。のんびりとアットホームな雰囲気がSF長岡をやさしく包み込んでいる。

1. 掘りたてのタケノコは灰汁抜き不要の瑞々しさ。2. 穂先の傾きで、タケノコの付け根の向きを見極める。3. 途中で千切れないように掘るには熟練の経験が必要。
4. 根元の硬いところは鍬で切り落として出荷する。



1. 少しずつ竹薮の整備が進み、視界が開けていったソーシャルファーム長岡周辺。2. ミツバチは巣箱を拠点に半径2km 位まで飛んで、花々の蜜を集めてくれる。
3. 収穫は春に3回程度、合計 40kg 程の蜂蜜が収穫される。夏以降はミツバチの生育のために残しておく。

自然の摂理に従って
自然に学び　自然と寄り添う

SF 長岡のもうひとつメインが、養蜂。ミツバチや自然に任せた「百花蜜」は、時期によって蜂蜜の種類が変わり、味も色も違う、まさに自然の恵みの味。ただし、SF 長岡のように農業と並行してやっている場所は「ヨソではなかなかない」という。野菜を外敵から守るためには必要な農薬は、ミツバチを弱らせてしまう。ミツバチだけでなく環境にも考慮して農薬を減らすと手間がかかり、野菜の出荷量も減ってしまうので利用者さんに渡せる工賃が減ってしまう。養蜂と減農薬、環境保全と工賃、バランスの見極めが難しい。

「養蜂って、その時のミツバチのエサをもらうこと。必死になって自分たちで食べる物を採ってくるのに、絞り過ぎてしまうと越冬できないでしょ。砂糖水をエサにするやり方もあるけど、自然に近いかたちが一番いいと思うんです。」

SF 長岡の養蜂は、ミツバチが生きる環境を整えて、その副産物として蜂蜜をいただく。あくまでお裾分け。石川さんの自然や生き物への敬意、共存の想いがミツバチにも伝わるのか、昨年は沢山の美味しい蜂蜜を届けてくれた。

里山にねむる多様な可能性

農業や生産だけでなく、さらに外に開かれた場所として里山の魅力を発信しようという取組みも広がっている。そのひとつが「あおぞらきっず」※1と協力をし、里山を舞台に行う「サトヤマアカデミー」※2というプロジェクト。

「この里山には、作物や生物を育み続けてくれている森からの地下水脈の湧水が流れているんです。この辺一帯に昔はたくさんの蛍が生息してましたが、一時から見かけなくなってしまって。近くを流れる川は護岸していないものにしていたり、私たちも環境に負荷がかからない農業を心がけ、里山を活かす活動を続けていくことで、ここ数年で少しずつ蛍の姿をまた見かけるようになってきたんですよ」と嬉しそうな石川さん。

里山を軸に多くの人が関わり、沢山の可能性がひらかれていく。もう一度、この里山が蛍の光で明るく照らされる日はもうすぐなのかもしれない。

※1 あおぞらきっず　森のようちえん
里山を整備し、子どもたちのより良い遊び場、教育の場を将来に残そうという取組みをしている団体。
http://kids.naoc-jp.com/

※2サトヤマアカデミー
里山の保全を学ぶ取り組みや、自然とつながるくらしを提案する「森のマーケット」などイベントを開催。
https://www.facebook.com/satoyama.academy/

おしえて！リジチョー！

こらぼワーク理事長のためにな〜る話

坊や　リジチョー、リジチョー!
「ソーシャルファーム」って、何かの畑なの? それとも牧場？？

リジチョー　やぁ、坊や。よく知っているね! ソーシャルファームとは、**障がいなどの理由があって仕事に就くのが難しい人達へ向けて、支援付きの「働く場」をつくる企業活動**のことだよ。1970年代頃に、イタリアの精神科病院で患者と職員が一緒に企業をつくったのが始まりとされていて、欧米に約1万社もあるんだ。

坊や　ふーん。日本にはあまり広がっていないの?

リジチョー　日本にもあるけれど、欧米に比べて遅れている状況なんだ。これからは、障がい者だけでなく、高齢者、ニート、母子家庭、元受刑者など社会的に不利な人達に向けた雇用の場として必要性が高まっていくだろうね。

こらぼワークでは「ソーシャルファーム栃木」として長岡と小山に事業所を設けて、**障がい者の就労支援**をしているんだ。

ソーシャルファームの原則

- 一般的なビジネス手法が原則
- 市場での競争がある
- 障害の有無に関係なく、全ての従業員の機会均等が保証される

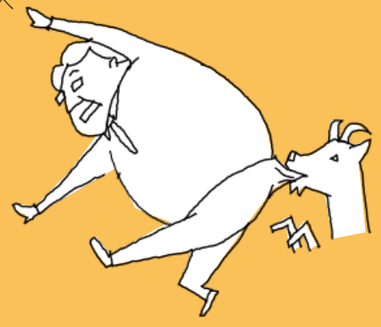
坊や　長岡では農業やってるんでしょ?
ファームは農業っていう意味??

リジチョー　「farm」ではなく、「firm」で人の集まった組織、会社という意味なんだよ。ソーシャルファーム長岡では、里山の環境保全にも取り組んでいるんだ。時代の変化とともに荒れてしまった里山の整備をしたり、里山での豊かな暮らしを目指して活動する「あおぞらきっず」と協力をして、「サトヤマアカデミー」というプロジェクトも進めているんだ。

そういえば、うちのマスコットヤギのモモちゃんも「雑草を食べてくれる」と聞いて環境保全の一貫で飼い始めたのに、おいしい野菜ばっかり食べてちっとも雑草を食べないんだ。グルメになっちゃって困ったヤツだ…。

モモちゃん　**めぇ〜めぇ〜（怒）!!　ガブリッッ!!!**

リジチョー　痛たたたっ!!!!
悪口言ってごめんっ!! モモちゃん!!!



こらぼワーク

仲間と一緒に、仕事をつくる

企業組合とちぎ労働福祉事業団

http://www.kyoudou.net

本 部	〒321-0152 栃木県宇都宮市西川田 7-1-2 tel 028-645-5561　fax 028-659-4959
宇都宮事業所	〒321-0152 栃木県宇都宮市西川田 7-1-2 tel 028-645-5561　fax 028-680-6598
小山事業所	〒323-0808 栃木県小山市出井 1523-19 協栄流通㈱小山物流センター内 tel 0285-25-1805　fax 0285-25-1816
福祉住環境事業部	〒321-0152 栃木県宇都宮市西川田 7-1-2 tel 028-645-5561　fax 028-684-2403
ソーシャルファーム長岡	〒320-0004 栃木県宇都宮市長岡町 293 tel 028-680-6612　fax 028-680-6613
ソーシャルファーム小山	〒323-0807 栃木県小山市城東 2-8-19 tel 0285-39-6270　fax 0285-39-6271

Publishing : CO-LABOWORK
Art Direction & Design : FRONT DESIGN
Edit : Hitomi Yoshida (FRONT DESIGN)
illustration : Syuichi Saito (FRONT DESIGN)

We are deeply grateful to all the people who helped to create this paper.

Copyright 2015 CO-LABOWORK. All Rights Reserved.